[illegible]

巻之五終

へ13
4345

本朝櫻陰比事　巻五

一　櫻に被く御所染
　京にかくれなき娘さかり
　あわてる[illegible]の事

二　四ツ五器重ての御意
　今をせんじめの[illegible]
　[illegible]

三　白浪のうつ脈取坊
　西[illegible]
　[illegible]の事

四　両方[illegible]の損[illegible]
　[illegible]
　[illegible]の事

五 扇の筆は命毛
宗清のかれ籠捕
たゞちをかく絶交の事

六 小指ハ切る指乃花
さしがねなき人
沖あらりまゝ(?)する事

七 振に縁り気乃人
下屋敷の名人ハ明石の方
家と海乃山伏をあかいる事

八 名はまてんねの奥
今のこぶやこの大尽風義
きんだんりの世をアいる事

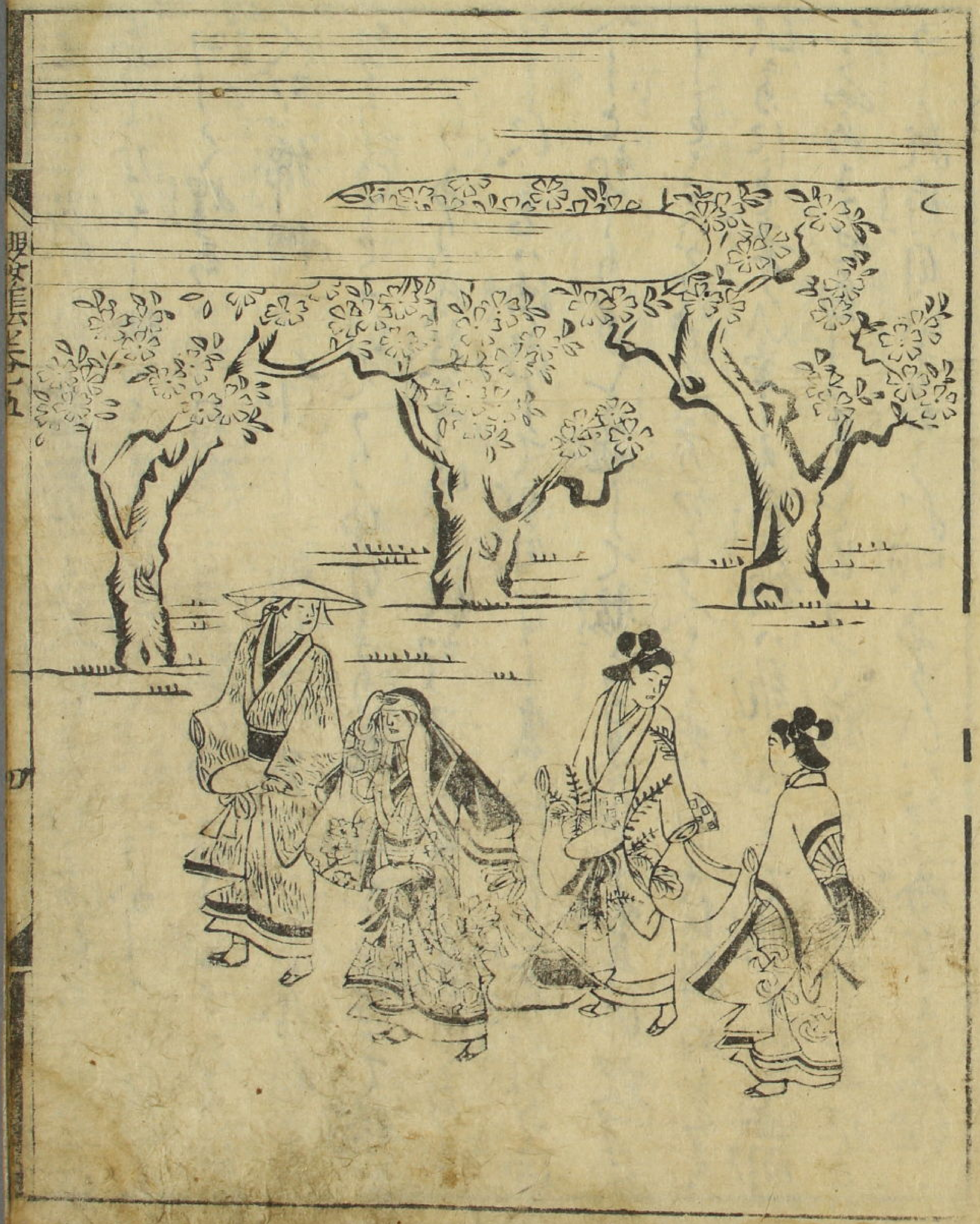
九 傍文乃能書
あたら月おしみ捕手の
よる中ごろ(?)すする事

一 梅子被る浮名染

むかし都の町に儀分限にて高家して云者あり
ごろさき世の中に若き女房の菩提の為に
伴八座とよばれて年中浮世の事を
語りける縁付の息女ハ母の歎をかたらひしが
肌をすゝめを女んせ気を詠の人あらはし
婦にありぬ又男の仲と無乃おもいを女
にあるともに家のおもりに吹れ物語をして
そくらぬやうに鳩を明ぬれど京中の町人乃
大かたえまうち海をせてめいよな事世を
此乳娘は年乃ころより数の言につゝりて十分
つとれば家の秋のすき通天の名墨ふつんの梅さ

りて大振袖の當世娘さへりとハ沢山かりきの花なり。
十人並ならぬハ自らの拙なる事を先にしる。お姑くるらし
きくハまち〳〵なれど女も付添 杖 伊今屋へ手付なき者ハ
ごくいづれも此娘の事也 形を歴くみかくして仕付師する
ハおよびなし。やうく銀弐百枚とみやげを付ねバすまぬ先祖
よ頭が入ます せずんバ皆 衣装も嫁入もなられぬ勝手次第
かやうに因縁中に金かくハ万事沢山に川に流すべし。
歎娘に嫁つられ生れつき中く人の依息女のごとく利
発になく世をも商人のかくへ奴羅し。此年田舎より
ての不られ親兄のない遊者なたハ抱子か又ハ女郎
抱への定角ハ人おしらいせぬ者へ形を済すとのふさそてお
よしハ何と同今年十八にて改通すまさそてもとまちきるよ

かくとら事の今時ハ年もとせつ八州ぞろりハ涙し済すよ
せめて十六よりして身を済して従ふて嫁入いこそ親ひよ
せすよしいらなくらるの傍ハいやで往来するまた川すぐに
十八すして形を済す先にこと相手をとんで拙也長ふと
なるハ浮世にまた川もなき事に成のまやうにいふてたくされ
あれ娘アえれハ済さ添不ぬまにハ身を年で実さ添
頭をと子細ハなし。その有先ならハささ癩子グニツ沙
なるなりかハ万うらて何の事をなしと裸にてるやうに
拙済りして油しまき乃添失婦を去せて今此世にと
あれやうな添娘の親もあり乃添しと此事を捨金す
親も同行中に似合の事ありてそれいそぎ云入乃るまい川
女房がよくして縁の付ハ親仕合なりと嫁すよ吉日を



定め男ハうゝ入歟抱かゝさへ入ゞ御女房立むかひ奥へ右
尚まなきを投らうそくれ迄ひらうにすかしてつかんれど
西のく煙草ハ片目蛇と通ひ女のいふ事よ如もろき律
人かゝ綿帽子の下より覗けど定かならぬ容姫とも
詞なり且もとたゝうけらり焼けてあり梅ハ妹さつんせて嫁ニ
なりけるり我教年此事にかゝるとて家もとももとどうらさ
つもしに兄ハ油断して面目なし実ハ何とらし無分別の事
べしと思ひりめと姫して膝立する事と聟の訳すさ
しもさうかば我方から人をとゝのけて仕掛ぬきこそ
此方にも幸ひ事ぞ無頭ハ難病とて喚なすれど世間
とゝめさせ動しが兄を出して祝言させすへしあれ方
のし其片目此方からの喚をかひにも命なき縁組と

三三九度のさかづき事して済しける此煙草自慢にして
男の様子を隠させて二親揃ふ揃て我かうしに無事の
生へあれを何を疑なしに世をもらんあつせ嫁を床させずお
の容抱もとも細すに聟の気に入らず此事無分
になりてうんぐ家し聟は仲人かゝる嫁の親もとこ思ゝ
此腹く済所領に事子細を隠し置けあるたんされ
事をあきされば此儀ハ嫁の親の無念より立て発まらし男
のうとまかゝる女者ハ女の身かひの仕合也思てゐ隠居
すなはち人ハ右を見せる事妹嫁とて聟ても隠居もなし
其男子こ今一組祝言させやうべし是又仲人つかまつり
まその儀ハあるもかゝる祖様より相聞し立試す
よろこひ定ある娘への祝言取かはし仲人わ手遠ある事て

けふひ嫁伝の縁組ハ闇かりの綿れ手前さ白て色た蝶へ
京都乃大笑ひに似たる事とや

二　四川大器かさねて乃湯こそ

むかし都の町に餅突すくなき師走のそら抱すくる春
乃年さことされハそくに母段の関大山を出より常咲の桃
妻子ミ来ておしかいまさむ京れ通りと未葉伺よりして先
祇園の社に一夜をおくりし火ぞり帳絵馬などに詠めし
うちまみ室ハらしき出立みして此ありさまを見ずは
しば荷物を盗こかくりけのすぬ桃売相どろかき局乃
湯乃かわきを売家しに返うけゆくまやうく八坂の塔
乃おもてそろへ京中に人の抱をされすけさしやんとかくるき
ぞ盗人も同意すりもめけど私れ人大勢あつゆりなから
いつまでとぬしさことゆ法ゑつがさし無人となとのお寄にくゆらかれ
徒擾ともなし盗人ハ三人のうちよあをとにきとすれ梅りし
湯あれへおせし無分同じように男なれともあら海し湯あ文庫
あをとされ一夜の桃を湯げ白洲に蘇芳さ世ハ無人つ家ま
まかり川て来えしかく見と室内よその湯こさ老人と定うけ
て京合ま人ハやうく出来せんかさ国ハ唐同よ京人ハまよ
へるまね仕舞を見より盗人あつかれを身丸裸にあそ
そうし帰かれに退掃ハ世話ひ比見物の桃売子のふさされ板追

三　白浪のうつ川脇ぬ場

むかし都の町に小田むさの傘を仕込職人でく大阪増子
を抱へ沢月に勝まふ本藁屋より涛やおを世生に屋め
ハ房日和の無分ハ出世凶乃仕合のよき時々月夜の路つづき

らの念仏にても皆この男子を休ませ此頃の内には既
宗治何とかいふ医者をよびせしに薬をのませて
喜しといふ所もなく何の症候もしらぬ事ゆゑたゞ是子
しもと浅薄なる療治を給ひて薬事ごとより横にならず臥し
て居る内ハ常に甚しく其身に気を付て内の若を
吟味する所に今度他人へまゐらせ置しより猶も掛置
まへん悪けれバ此く薬をのませ内より咽喉も気を痛く
ぬ。喜ばしく聞えて又病人に咽喉の腫より結れし所、誠に
乃ち銀子棚の或ハ余しが覚えぬに橋を渡りさ飯く
金の後の宿に志を訪ねし此事町の寺に於して扣続す
処にて此頃盗人が来りて其寺にあらず門を閉て東の道を
し、兄弟よりて八十歳の老子に成りとて又従ふせん

ざんも見に極めて此度く御所領中に参りてつの御祈禱
めしよせられ御見分あそばさる所に男子にも御おまね
られて幻のごとくの四方に頭先にならして此く事の入候てらる
かつした者の人々と御念願の行き方をも大勢の婦女いさゞい
有面して俄に病事に出れ其のも惣中にも連れ給ひてそ
せんぎつまりがたし 扨て人間の作にも生まれつきにより出でずこと
しれ事にも取るらく者ゆゑに男の大事を了清てもと
かりて見苦しき浮ぬ者にて窮屈なき携問する事にも道理なるゝ
すこし此見能き得く思案めぐらし彼人の内儀ある時
御前より御金銀の内を預させられ後世せさせられしも
見る地子の出入の医者をまし寄せて此男子ともらひ
脈とりて不斗と極ずみ乃ち療治者あらそひ此まかな

くすりなどゝしと一向にまゐらせず隠し。其歳十二三の年
子なりし人玉琢れ醫人は内なれバ只今擁して
そも粋とありすなり。ひとまつくまらり浮まりくすく
で奥へ御らせで。方に見んなき。ことを見とおもうゝるき
気んなかりけれども脈ハ常に替ることなし。その
順分薬付ておいてと不思ふかゝりぬ者なく此脈形
気より急刻よりもちさかきたえんあるとおもゝ倫しぬ知ゝと
人月て此脈のまゝらふれのまて若つゝまく御合要の
上頭れの和漢で白抜ゝ患者と初まうず時。玄白御
術撚あげしハ此者は初子の中にも先見書務鑑して
おもゝ数わり将子同じ手仕り玉すいく八天経
まり起て松の名練をと継しや孫まてんじ無て

海へ入りしは、おのれが猫を落し同じく流れて候
慈悲に此科を御ゆるしなしくだされ候はゞいく重
出入の者に仕合よく、言上せしに、親ひの通り御免
新八御免くださるれ、あとの者に難義かけずして悪
人なれば、いよいよ傍にてなしたる細工の傘まで
富貴を追拂へと仰せつけられまじくとや

〔世〕あたりかくれなき浪の頭ぬ蔵
むかし都の町に同じ者少輔乃堂同座に雑魚の里に
夫婦組して此妻十四年なじみて男子一人七歳になり
時親類相果て、此女房を家の名跡と跡を継
ぎめて財宝ある程家すて男子十八まで
預てかんせいの者に預け毎年礼物はたとへば何の

親類中、其の外念比成者ども、商売仕込の金に
金子五百両あつめ、是を新兵衛より此子十八の
年までは預り置べしとの事、又あとの親類より此方
へよせ参りたる、此請銀にて済みて来る。毎方
にかけ金の口借りて渡すべしといふ事、此請ひの方
預りせし分を奉行所へ言上せし。毎方より家ぶ
子の義親類町中へ申合して、証文なきに、おのおの
念を入れ見るに、金板の證拠、おのおの身の一門
として判を付、又主人の判証には、母方の一門
付金板の又母方の親類のかけひの一ぶんに
預り置、十八になる時此金を相渡すべし、其外のかね
代に預け置、しかし母方の親類のなき時さされ

てかへし此間無事安全すくしてへえたの乃明さる
事を深く感じれ侍るなり

五 あぶなき抱ハ筆乃命毛

むかし都の町へ親ハ家をなかりし大分金銀を多くたえ
てなをとやめてすて働く隠て町人の気隠して実銘
のかかりに偏く侍がるすくまて美男にして世の
人の多葉ぞらのみまでも学び移せ侍事なし中
まど能筆にて諸商人の無あとしもなかりし親累の
て隠居を稀侍くも抱まし古来様女ぞるひまで
きの猫ハ妻ひ撿就屋実侍てても家業し．あまた
にも此道をやめず初中後ぞかりのあとへとせ年
同業つゞけ同足のこゝくなし．撿女も年月れ様

さまずれず浅ろ多なり川でもんをと通りせ侍時
いひ合此者をと深無いかさるまれ家武邦ふし其月隔節も
極めりて無実つまむとんうへぬ押まふ無事にやとらるく
あまき出まく人かうらひ八．女房母ハ好侍をと卑賤まよ抱へ中
白雑子らちかけて侍ぞ有なからさ侍ハせ侍をた門の書
者気をんなすら難あ料へを比有あれしやいなる人乃
独母やんさ無常を親しに侍．手本まま亡夫がなんえぬと
変化して同妻におぞきまに今宵にかきれて嫁来なる
揚名酒切らしてあまえ侍と．野おとりが起も川まさ
こうりハ鏡ともにせぬこの一．独へとくるい中をまた余すま侍
ま此毛乳れの出来なし此仕掛まて留出しま捨ること．つき
くれ無もせんさくきてもまる難し．文とも頭めぬ侍

てまへてこんたんして験分にとりし御蔵より國果ハ當
乃下に名出乃なきものとも川を中に温出へさ間
詫とも手つけ爲り置を尼有ハず御家に於宝人へ分筆
錯まこのひなし置を拝授に名をさして法術秘
とれを兵宝人へ止めされ比文も亡方に紛を加へ依為づけ
みつしに私も身ハあわずことく御蔵継しハ此文乃道
まに受べしとの御言に而神の世筆指子均くれて名別
手筋をも遠て本家時に綴世出されしハ此文に不ちが
ひく御家ハ最重忘なりおく処りいせしこゝ方名
のち御家々と是今おし御家みと拝遠る手静有そへも
自然手本ゆへなり只漏へてきもりし御家々とも見えぬせら
まゆく渡んあさ恋し父君に忍名に手柄り遠ひけ遣ハ

家の手柄して御家の手よ系綴世付し達し此てひへの宝となる
了御の綴世あるべされ手せて此御ん有御手に筆ゆきしハ
遠て手付られしも名字の柄り墨継すへしとも無が
いず是よりいよく浄念來に有りし連此宝人へ無事に忍拙
大寺七十両の金子をうしなひ只男節つ柄し御家に言
彦時是に組合へ御家成達しけれど右の御家ハ此男ん此女に
之信中と家に此女良を取付まして詫当す物未此男行し
得ハ此金子いづまも金力代を頼りしてゆおきにもとく入結
ことさ神と移ひたりし比女良乃金へ金子なをなほ扱所ろるとや

六　小指ハきるとて置れ置

むかし都乃西堀町にて小判の賞の重積乃扱擲月に蔵
とひろ屋ハ事あり中間へいひあはせて第あるをも自遣に

仕掛すられ商売借は手形済でもなく気様よ
志売して為かひにはやりけらしぬる時人の手代は
判捨子かかりて四五月も過ぎぬうちに借方の為ひ
者は帳面をさへ見ぬやうにせんさく仕かし。捨子は子細も
なくてまゝ手前は仮まで済ぬ所の月掛くまかりへし。無常
ようとせんをも日より後の勘定を仕立にくるらしよく
捨子姑として持とらぬに拾ひあげ海く吟味仕おかれ
是非志れ難く金子ありとつかはすなれども今まで
為すれども自今以後のため連借も借りの為ひ者あるに
親子をとめしつき道慎しく書付をとりて済ましむ
に借あるの中人分清めの屋あるぞされ借りその手代の
まとめ事の金銀の外にさらしてさらして[illegible]

まずれし事を思ひ出すらぬめして、右の事れ[illegible]
をことりにて是非の世是れ封判して済仕しあるそ
ちしの借又借しこ借らこの為ひ者清にて[illegible]
之ば事れ相済にて[illegible]中と門ありくにも店[illegible]
にて五にんは十家經營を持べしとかるひの悪き後世付
させられ高に借り故。小指くうら[illegible]代えでめよ
の悪人あり川でかく借清人使縁よりので是非人[illegible]
寒暑を掛代ら不念にて捨子の金子を海をぬすを
おもひ出し借後清所經ふあくれも只今合点ゆき
て金子を済すよれの子細なくこ清めまた借とも

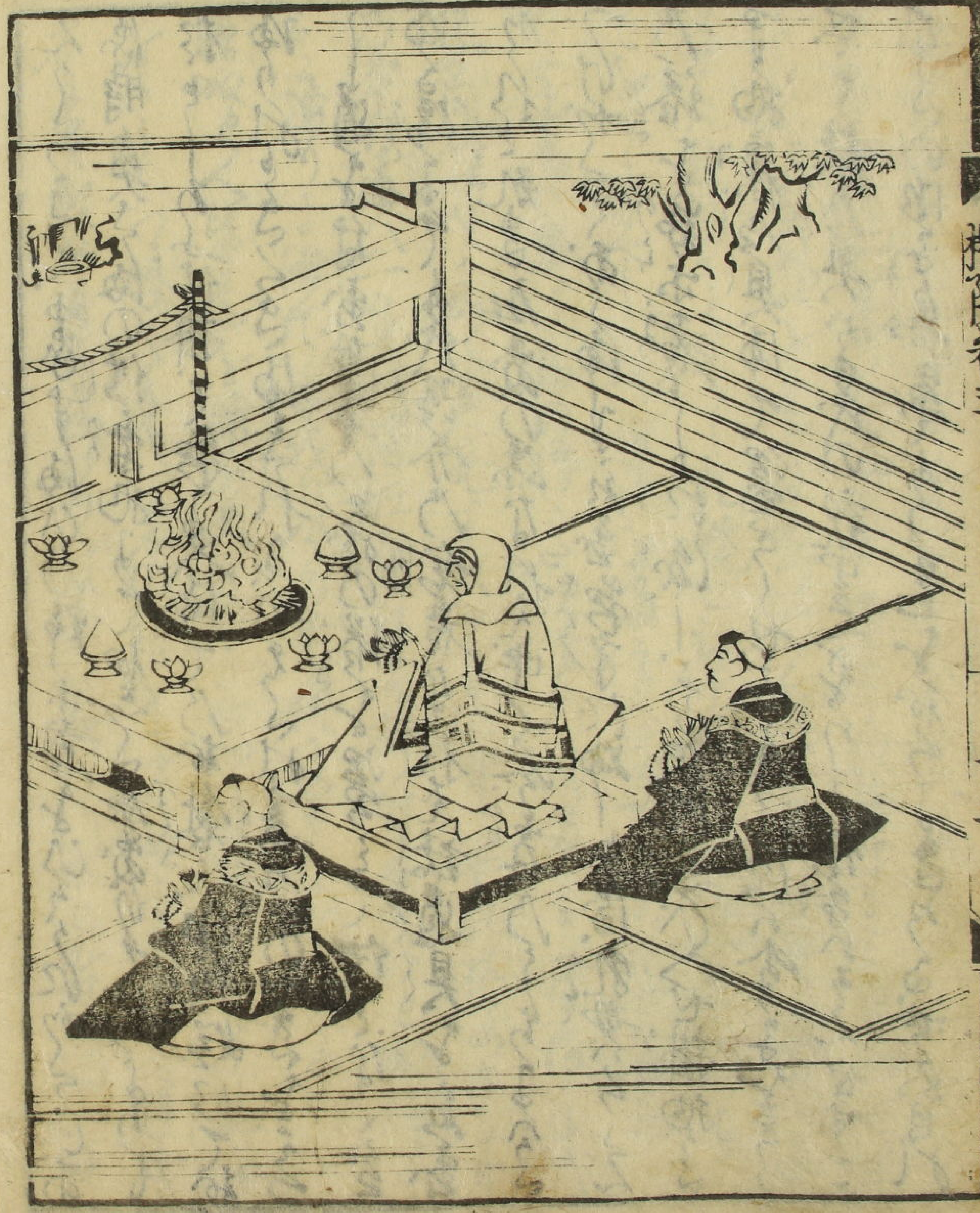
「七」懐に捨り気の人

むかし都の町人貴賤より道にして三条の縄に下

座敷をこしらへおかしのあそび所なり。又しくめしつ
かふ手代隠居者形気にて市中に住じき家事をはから
ざれば此座敷をあづけ仰付させにくはせるか
稀ては地頭そろて乳姥ご部屋にして商売乃ことこ
でをとゞむべしと此内證を承る女中の世話乳母は合点し
て若旦那は奥さま御の傍さら親方中に居候手代
参同心せず多く異見すれども此手代ハ殊に機嫌ある所
乃事に違ひハ一生丸縁組なれバ押付業にと如雑く
もと通りに添て手代ハ今の若旦那を祝さめあれと
婿奴と人皆言を請出し乳母ハ安心に喜ぶとなくぬれす
をうしなへて手代ハ若の雛をかくあやめとも此田舎迄
者まで親の身寺帰りれ我ハ妻ハ門へも出ず何にもせ

んくらうきて中宿す海ひ乃野乎者をひそかにかくまひお
隠時奥さま海の傍を手招きして勧めきと座敷にりてはつまりも
おとしめ不仕掛て親の父海て乃御屬之、此摂燈にて物
語りれどきゝてさ海きれずに川ぞされ妻あるへのかぎさをたてず
し道をも付出据置乃道の搭を深めさして何となふこゝ
海る陽にて手代隠家乃合者なれど諸道具をあて新出
かれど乳きま座敷の隣なれバ串く今宵乃うちもゆるさ
づけがくて南海まう新出宿手に縮しか所乳母ハ合点
乃緒を野木者ともに添しも挽に悲びへ世掛抱らざ
里抱寝乃奥海で望さして世をまうつ此ハ今子をもて
世、かの親の奥ハ手代の親里へ来りし、椀子ハそん女すこ
なきの隠子息家より足をおくらし送れる。世ゑ見れ

うちに清玄法師は侍りけると今思ひやうにも世にたぐひなき代々の弥
何かとなく是をあはれみ玉ぬ平明の日々代初めて為き
清玄への入に候ふまし新たさや事なれども主人恩愛して是
八幡宮を志ぬ者はいふせし事にあらずさらに達し肉
清玄受戒すべき子に比叡山の物語とて山伏の托にまた
の名を是と傳し乳母が社避玉奥さへ疾からひ通し
て此坊の主とものえ世て桜子を語りかせ先くかさと
なせしに此清玄の入へ前の花をとふん通してく世べて
いし女乃思ひ入へ手叶ひけよいつかく彼に今なりもの者をあ
らうして語られどいつぞ山伏清玄然して此の寺肉入中に
初よかすず、中に住し清玄を抜て其名を鍛へさせらる
三年の入後く名を志かし是を御世代々の国のうちに



そのかく鏡授をうけんすべしと進ミ明日は京中へ連なる
べし其中にて爰ぞ出しける。其日ハ私ハ宅に帰りて
其の月半の刻より当寺よりて大勢の中へ出しける
ハ只今此名虫を懐に稱して我身はり主人ハ其名に
不動の不主ん稱るべしと則ちかりようげてんる所
急きざくをあらし主代の名出をされ此所へし不動乃
後光稱りぬ梅のを見に枝の新ハさらくころひんるな
まそく主代ハ見んなき事ハ出懸いくし見抗ち筆ハ
一念ハはすべしと枝のふちち子主代の新葬のか
津へひそかに人君りしん所子に空二抱あづかり剣を
せんさく仕出しなを又海されなりしと山伏の法力に
捨て振れる目出ためきさこいひしに人ハ忘れぬとのされ

御法せられて此主代法事なりがたく山伏を招まほし
て御術候とぞ申しけれハ御家の人々を取まぜす傍おかまめし
出されて彼の奥観の縁子の鉢け見ぬと修験なされ物
ハ主代ハひさしき事と御殿の東門で物出浪をめされ此家
乃行力あんてきな所知持ち寄りたるんず修とがわ
く御わびびの上此ふんにと筆ひさんかれせんさく者れく
宜布るれぞく出しさせとも大人名出して何国子沼へ人の
と任せしましに山伏悪懇して先わ情やを宿子海
星夜れでく呪掛かれて御おへの人お見を懐に経
せんこも傍にて人あしくさ主所しあられバ所御あ
子大勢ひなされせあて此国になへとも世ハさびくなり
お出き主村の何の子細となさき事さ人もふりにあ

らはすは黒主が娘とはおもひの外今様の世すがら見え乳母がれきゝ
し悪女の身あつかはれ苦れ野呂木者しも同様に仕せつけ
られけるも是は山伏客坊の時分りつきされ囁てゝや
剣しはさらひあつかひの百年目縛に掛けし名字乃す
かゝる事は神仏の遣りけりまて尋ね度し大き掛けと
手癖く擲りぬ須ひ事なりし是で大分和泉屋丸れる。
是を形見に傳受らるまとまた人惜こりけれて笑ひけるとぞ

八 名は古へえて見ぬ人の事

むかし新町に人の異見をきかず。新の遊女に賊實
鉄すがまゝ隆浮世くるひに身を宮川しなかゝ
いまけもなく悪所をとかくさ中間に捨しりぬ人生れ
ながらみしてかしこかしすみ奥人となりしは者も世に

時は無益にて百の事分別を遂げず今はすりきれ
宮川もきこえ言はなし此千とせの男子に思れ形跡
て親子乃補なかりし家行子伸もとなき真男なり。
中間とて此男をかく伸人主人の遣ひなきさうし備居して
重て家名を手をれて家れ悪くの家名を継ぎ由緒
手代を記しめた底に此時は此男を抱大根指の男子なよ
仕主総を家来の宅後傳てまへ人とかわらず櫨く大勢の
者親族の者分別もけのあし度つきなる待ち付
て悪ひく手代東川も此乳母も宿にて披露ありし実
ぶんよろしこゝ世をし彦兵衛の命にあらそ金銀は何程
物しも路銀にれ形見させん乏しく萬くみくれけり也
此伸への果ねとりて三家中をさげて分けづけるき事

つき退て座をさくとの子御挨拶をなし。新しき御披露なれ
乃御しに出を開しは事随分世間へ陰すうちにもや芝
居の末社しも出かけしは富をつけ也無理に御入座をさせ給ふ
つきつきにさされ拙者ごときは御座敷にて皆く是也事をもて
ひいき大臣は無量れ御免なとと申候へしに富貴への相談めづら
し気は川柴乃ちんじやうれ随捐なり。ひいき御くくと名く
思ひ付時なれ人ゑ。鄙者らしき人を難ねるに小声しは親仁に
当国人平生気にて御かけなるてあかられ中で御座の
人ゑときも分かせとあれ是。我も人と法会の名をせりあい
まうむなてもとやすき御用也は名残をさりて悪気和尚を隠
人にけきべきむかへるまま帰ていおやくに主人しと
世間並の利根にて道あ。大臣の一親にて我に無隠人をと

金子は東山乃高台寺に勘気し。大臣の自分筆の手紙
官都を先へとどけて縁りぬるも厳切になりいてもと不埒なれ
ば手の道理に付属けすれど只人し。とりたぬ事とも不首尾なる
迚すに名ざき女の者ども。とよびよせる人を知つねなる
に行状の傍居往ひして悪酒自身にかけて勇体百目が
物ハなり。是ハわきまへり世間ともせんきてすれども此男すらも
勤ぜず。かしわら屋にて此物挟我身ハ放埒ていきれと名れが分限
者の子にお俤なや。我身と作て名においてあらずと思へバ
町家にて身つて頼ひへ。遊情振舞と放蕩なしこれかりて
我あへず。廣き新なれど同し遊所に同し名のある
事さ於て不風義にてもあらず。此財分ぞんず家に出とりて
乃親子大分今年を借銭の事をも父のかきかへなるべく

ときゝし御しるしに狩衣なかりしを小刻にはおもひこゝろねハ
やり取ともせず今さらのやうにあそばしてからは何もなき衣
らぬハ雑蘭なりとも通し也世帯道具ともかり衣裳なりまで
も雑の袖は一気ともなし。まさしく此袖よりは矢の命にも楊
諸礼の事に大小の鼻ねら。猶童の心にも女郎
野郎の文がら。身をすてもなれし袖は見るべかりし也。命も乃
論ハ無用新しい川おの家を切て後へつまく雑の袖は見るへせ
ぬと首さしのべてよせし今は此事を免して我ゆり候
御ぜんへ御渡し候やあらんご存にそこしめされ萬角ハ
そこのもの無分別なり。雑文世にては候らでも今まではよかるべし
き家利を以て遁出て行せられ候ように也

「九」俳文の紙の文

むかし都乃町に俳見た文とて紙の指南して世を渡る
白川将監といへる者住て其仙丸山乃庵高紙を大く
ひろむ文勤めに候を我ふかし古堂俳見に登り寺を世蕉翁
まれ武寺おける月見の池にてそんよく為きくすこしよくりれ
候名池也。秋ハ奇道んぞし婦きの人あ師の宮のまへつまり
至て月をとる人候に庵の萩原家もけく諸人集るずと
不れ世師き事付俳人に掛けかなりにかり居なりてこと
数年の宿きあるらしが此頃ひ奴隷せずしてもらぬぞ事
紙の文俳へ令に三首の釈進紙してまゐを達せんとなる
我とひろめかく老人なればぞ俄に足をのべて時節の
相道候よりも梅に御座に弟子ある時に山たま文川大

とそ三人ハあれほのごとくわらひ大にたどみ代々までに。
相勤めさせ申御奉公せしハあるを見るす事ともしそれハ御
恵の海よりもなをしず命を掛て此報やむ事なくふかや
しかるに地獄よりも多く思ひ闘れども一二日繁りしが
せんなく残念ずして大悪首尾せぬ事をなげきしが
ハ是非なし兎角御前の御次郎と云男の猿を佐
出しけるく御前ニおゐて如此の三原新庄所領ハあしきにより元にて
我ともと云御事悪人にもおもしずさせれ元の如く相続すべく
きそれすぐれる者にもぜんを見せすず勤めてなり
是にてあれハ男子なきにて追善をとも付ぐべし
またも万のちようあしきものをとぢしひの元ほ分に
ひすべし。猿鉄追従の五ゝ不届寺なれバ今ハ

江戸を仕るを得させし時幸ひにししろを相勤めさせ
ハ御前よりも御勤めとおもひし院すみすでに御白洲まで
つゞめにあら首尾よく万事相済めし後御尤にあそばし
御ところなきハ猿の善悪ハ志猿ども川北にも出来
候よりて其ほかの原のこゝ子細ハ白洲にてちたふ
てらにも家中是ぞ猿子をハんや又相もしかし此山さま
又よ寺をはずくてををよミこまかせてもとのにありがた
く。天下泰平国土安穏今日外御をとらせて御
利をらとも

元禄二年己巳正月吉日
江戸日本橋青物町　萬屋清兵衛
大坂心斎橋筋順慶町　柏原清右衛門